

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	外国につながりをもつ子どもの方略的言語能力を支援する教材開発 ー小中学生が使う若者言葉についてー
キーワード	①日本語教育、②外国につながりをもつ児童、③言語能力

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	チャウ ユン テン CHOW YUEN TING
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	長崎短期大学 国際コミュニケーションコース 助教
現在の所属先・職位等	長崎短期大学 国際コミュニケーションコース 助教
プロフィール	チャウ・ユン・テンは長崎短期大学の日本語教育の助教で、外国につながりをもつ児童生徒の日本語支援及び社会的支援に関する研究に取り組んでいる。特に児童のニーズに合わせて教材開発に熱心している。

1. 研究の概要

本研究は、小中学生が日常生活での言葉遣いや話し方を把握し、外国につながりをもつ児童生徒に円滑な人間関係構築のための方略的言語能力を支援する教材を作成するものである。そのため、日本語を母語とする子どもの休み時間や、SNS 使用など多様な場面によるディスコースを記録し、分析することで、日常生活の場面での日本語表現を明らかにする。

2. 研究の動機、目的

グローバル化に伴い、日本国内小・中学校に在籍する外国につながりをもつ児童生徒は年々増加している。文部科学省(2022)の資料によると現在約 123,830 人の外国につながりをもつ児童生徒が存在するが、日本語指導が必要な児童生徒は 10 年間で 1.5 倍増加していた。しかし、児童向けの日本語教材がまだ開発中(表1)で、教材開発に関する研究も円滑な対人コミュニケーションのための日本語教材が不足しており、生活のための児童向けの日本語支援が必要だと指摘されてきた。外国につながりをもつ児童生徒は、自分の意志で来日した訳ではなく、親

(表1) 児童向けの日本語教材に関する言説

研究者	内容
吉岡(2008)	学習者の増加や、学習目的・所属・年齢・学習環境などの多様化に伴い、それぞれの <u>学習ニーズに合わせた教材の必要性が高まっている</u> ことを意味している。
国際交流基金(2010)	世界の日本語教育現場における日本語教育上の問題点として、「 <u>適切な教材の不足</u> 」が一番大きいとされている。
坂井(2013)	<u>多くの帰国・外国人児童、および海外における日本語学習者は、学ぶための教材が不足している。</u>
チャウ(2020)	<u>児童向けな生活のための日本語教材では適切なものが見つからなかった。</u>
チャウ(2020)	<u>学校の授業の他に、生活のための児童向けの日本語支援を望むのである。</u>

の転勤や就職など移動を伴う環境の変化による理由で来日した経緯がある。つまり、彼らは日本語学習の機会がないまま、日本社会・日本の学校の一員となってしまったため、日本語学習やその支援が必要であると考え。実際の、彼らの日本国内小・中学生

に相当する年代の「不就学」の該当者数は文部科学省(2022)の調査結果によると 630 人であり、就学状況が把握できない該当者数は 8,658 人とかなり多い。その理由として、経済的理由の次に、「日本語が分からないから」という理由で、不就学を選択していることが明らかとなった。

教科のための言語支援は当然必要であるが、一日の大部分を占める学校生活では、友だちとの会話がベースとなる日常会話のスキルが多く求められるだけでなく、文化に根差した対話能力が求められることが多い。つまり、教科のための日本語ではなく、生活するための日本語が必要である。

例えば、文化庁の令和3年度「国語に関する世論調査」の結果概要(2022)によると、現代の若者は、従来使われている日本語の表現を変え、独自の言葉を使うことによって世代間、コミュニティ間の新たな言語コミュニケーションを生み出している。宇佐美(2002)は、ポライトネス理論と対人コミュニケーションの見地から、留学生が発する教科書通りの日本語と日本語話者との会話場面において生じる「ある種のぎこちなさ」に注目し、「友達同士で使う言葉、学生言葉、若者言葉を活かせるようになっていくなら、親交が深まっていく」一方で、「(教科書通りの

(表2) 新しい言葉遣いの使用率			
	従来の日本語	新しい日本語	使用する率
①	そうではなくて	ちがくて	46.20%
②	あの人は走るのがすごく速い	あの人は走るのがすごい速い	79.10%
③	あの人みたいになりたい	あの人みたいになりたい	34.60%
④	なにげなくそうした	なにげにそうした	67.40%
⑤	中途半端でない	半端ない	68.20%
⑥	正直なところまずい	ぶっちゃけまずい	70.60%
⑦	実態などをわかりやすく示すこと	見える化	36.80%

日本語を使う事で)もう一步踏み込んだ友好関係を築けなかった」と指摘した。このような方略的言語能力に関しては、ブラウンとレビンソン(Brown and Levinson, 1987)に

よって仲間うちの言葉を使うことで、円滑な対人コミュニケーション(ポジティブ・ポライトネス)、つまり「人間関係を円滑にするための言語ストラテジー」として多く認知されている。敬語、丁寧語、謙譲語など社会的場面に応じて使い分けることの多い日本語においては、場面や対人関係においてその状況に応じて言葉を活用させねばならないが、多くの小・中学生が同じ地域から通う日本の学校においては、例えばそれは方言や若者言葉を含む「教科書では学べない」日本語の使用が多く、環境要因により自然習得するものである。つまり、外国につながるをもつ児童生徒の日本語支援に関しては、教科書で学ぶ日本語に加え、円滑な人間関係構築のための日本語に関しても同様に支援をする必要があり、この支援によってこれら子どもたちの学習権も保障が可能と考える。

これまで日本語教育と並行して児童に向けた日本語支援や外国につながるをもつ児童生徒が公的教育を受ける際に支援員として活動をしてきたことから、これらの支援は喫緊の社会的課題と考える。そこで本研究では、学校生活の中の休み時間における日本語母語話者の「若者言葉」使用や、話し方、SNSでの表現に焦点を当て、表現や語彙を抽出し、それが日本語母語話者の児童生徒の間の円滑な対人コミュニケーションにどのような意味をもつかを質的調査によって明らかにする。また、抽出語彙・表現に関して外国につながるをもつ子どもたちの認知度や活用度を調査し、外国につながるをもつ児童生徒の日本語コミュニケーションのストラテジーと比較することで、「円滑な対人コミュニケーションのための日本語」教材の作成が可能となると考える。この時期の児童生徒は仲間を通して自己を確立していく精神的な成長を遂げる時期でもある。よって、この「円滑な対人間関係構築のための日本語教材」を作成し、使ってもらうことは彼らの成長に必要な物であると確信する。

若者言葉調査結果				
属性	小中学生 (31人)		留学生・ALT・外国人生活者7人)	
	使用	不使用	分かる	分からない
①ドンマイ	23 (72.4%)	8 (25.8%)	24%	76%
②論外	24 (77.4%)	7 (22.6%)	29%	71%
③草	15 (48.4%)	16 (51.6%)	14%	86%
④ww	15 (48.4%)	16 (51.6%)	71%	19%
⑤ギャルビー	6 (19.4%)	25 (80.6%)	14%	86%
⑥リ	9 (29%)	22 (71%)	14%	86%
⑦がんば	18 (58.1%)	13 (41.9%)	100%	0%
⑧おつ	17 (54.8%)	14 (45.2%)	14%	86%
⑨キマゼット	1 (3.2%)	30 (96.8%)	0%	100%
⑩やばい/やべえ	25 (80.6%)	6 (19.4%)	100%	0%
⑪オケまる	3 (9.7%)	28 (90.3%)	86%	14%
⑫黙れ!	15 (48.4%)	16 (51.6%)	71%	19%
⑬うざい/うざ	19 (61.3%)	12 (38.7%)	71%	19%
⑭あたおか	5 (16.1%)	26 (83.9%)	0%	100%
⑮ちくる	14 (45.2%)	17 (54.8%)	0%	100%
⑯無理ゲー	2 (6.5%)	29 (93.5%)	43%	57%
⑰タビル	2 (6.5%)	29 (93.5%)	14%	86%
⑱うける	19 (61.3%)	12 (38.7%)	43%	57%
⑲とりま	11 (35.5%)	20 (64.5%)	0%	100%
⑳それなー	16 (51.6%)	15 (48.4%)	57%	43%

【予備調査】

2022年に本研究を進めるための予備調査を行った。①ZOOM通話を用い、日本語を母語とする小中学生(7名)に約30分程度の簡単な質的調査である半構造化インタビュー調査をした。この調査では、若者である外国人在住者(以下若者外国人)を対象に、日本の小中学生が使う若者言葉や表現の認知度を明らかにするため、GoogleフォームでZoomを併用してアンケート調査を行った。そこで、抽出された若者言葉は左図の通りである。さらに若者外国人に若者言葉についての認知度を対面、LINEビデオ通話、ZOOM通話を用い、一人約15分程度の簡単なインタビューを行ったところ、ごく一部の表現を除いて認知度が低いという結果を示した。

3. 研究の結果

研究方法：①小学校現地視察及び交流授業を実施

②教材を使用した協力者にアンケート調査及びフォローアップインタビューを実施

研究対象：外国につながりをもつ児童生徒

研究協力者：

① 本学と交流がある小中学校の児童(佐世保市相浦小学校、九州文化学園小中学校)及び本学に在籍している留学生と教職員

② 「子どものための日本語教育研修講師育成コース」を受講した教師

期間：①2023年4月～10月

②2023年9月～1月

3.1 若者言葉

2023年4月から10月までの期間で外国につながりをもつ児童生徒が在籍している公立学校及び私立学校に現地視察(計6回)と交流授業(計4回)を実施した。これらの活動を通じて、日本語を母語とする児童生徒(n=120)が日常生活で使用する言葉を記録し、外国につながりをもつ児童生徒がそれらの言葉を理解できているかどうかを確認した。

その結果(表3)、いくつかの興味深い発見があった。例えば、従来「いいえ」と使用されていた日本語が、現在では「うん」と使用されており、その使用率は100%に達していることがわかった。また、従来「面白い」と使用されていた日本語が、現在では「うける」と使用されており、その使用率は81.6%になっていることがわかった。このような言語の変化は、外国につながりをもつ児童生徒が日常生活で使用する日本語の理解に大きな影響を与える可能性がある。

(表3) 実際使ってる新しい言葉遣いの使用率			
	従来に日本語	新しい日本語	小中学生使用率(n=120)
①	いいえ	うん	100%
②	本気で	ガチで	78.20%
③	真剣に	マジで	54.80%
④	焦ってるときの「やばい」	やばー	80.60%
⑤	すごい	エグい、エグー	35.50%
⑥	それはそう、確かにそう	それな	48.40%
⑦	話題を変える	変な話	60.30%
⑧	ありがとうございます	あざす	85.70%
⑨	くそ	くさ	29%
⑩	面白い	うける	81.60%

3.2 教材の使用

成人学習者用の「生活日本語」教材を参照し、2023年9月から2024年1月までの期間でテーマ付きの教科書を使用した。(図1)すべてのテーマは小・中学校で現れる日常生活の場面を参考としたものである。

例えば、休み時間に友人同士で「かくれんぼ」をするパターンが多く、外国につながりをもつ児童生徒が遊びの名前などを理解できていないのも現地視察でわかった事である。



(図1)

3.3 検証

2023年9月から2024年1月まで「子どものための日本語教育研修講師育成コース」を受講した教師の方々に使用された教材についてインタビュー調査を行った。結果は以下のように示している。

その結果（表4）、いくつかの興味深い発見があった。例えば、既存教科の日本語支援の教材とこのような日常生活の教材を統合し、それぞれの使い方をそれぞれの場面で表示する教材がほしいと何名かの教師が提案した。

（表4）インタビュー調査結果	
①	日常生活用には使えるが、児童生徒がそれで教科の言葉遣いとの分け方がわからなくなってしまう...
②	外国につながりをもつ児童生徒に役に立った。
③	日本語能力が低い児童生徒には難しいかと...
④	すごくわかりやすいけど、「です」「ます」形になっているから、子どもの言葉と違和感がある
⑤	教科と日常生活が同じ教材で出てきたらありがたい
⑥	今の時代には、紙媒体よりデジタルの教材がいいかも
⑦	使い方が説明してくれたので、すぐに使えるが、多くの人に使われない場合も考えてほしい

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究の結果によると、現在多くの日本国内の小・中学校に在籍する外国につながりをもつ児童生徒の日本語力は、日常生活の簡単な会話しかできない状況にある。そのため、友達作りや教科の学習に支障をきたしている。今後、これらの児童生徒に日常生活の場面での日本語を支援するため、現在作成した教材をベースに改良し、既存の教科カリキュラムと日常生活場面の日本語教育を統合し、学びの一貫性を持たせたいと考えている。例えば、国語の授業で日常会話を取り入れた、数学の授業で買い物シナリオを使用するなどの方法である。

また、日本国内の小・中学校の教師や支援者は、外国につながりをもつ児童生徒に対する支援や教育の経験がほとんどない。そのため、教師や支援者向けに研修を実施し、外国につながりをもつ児童生徒への支援方法や教材の使用方法について指導することで、多くの児童生徒を効果的に支援することを目指している。彼らには研修とともに、教材に加えて指導ガイドも提供する。

現在の教材は伝統的な対面学習を前提に作成されているが、将来的にはデジタル教材やビデオ、アプリなどを開発し、テクノロジーの進展に対応した学習ツールを提供する計画である。また、オンラインのコミュニティや学習プラットフォームを通じて、多様な文化背景を持つ児童生徒同士が交流できる場も提供したいと考えている。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究を支援してくださった支援者の方々に、心から感謝いたします。皆様のご支援は、外国につながりをもつ児童の生活や日本語支援、教育に大きな影響を与えてきました。社会的な弱者である彼らのために、皆さんが私の理念に共感し、積極的に取り組んでくださったことに深く感謝しています。

支援者の方々の貢献により、外国につながりをもつ児童の悩みが理解され、将来、日本語を母語とする児童と平等に扱われる機会が増えるなど、多くのプラスの影響が生まれています。質の高い教育を提供するという私の理念において、皆さんの後援が大きな支柱となっています。心から感謝申し上げます。

